

《特別賞》

水と私達

大阪府 大阪教育大学附属平野中学校 1年

まつだ
松田 未来

水道のじゃ口をしめ忘れてしまったとき、「しつかりしめなさい。もったいないでしょ。」とおこられたことはないだろうか。

低学年のころ、私はよくじゃ口をしめ忘れていた。私のせいでよくじゃ口から水が垂れており、母におこられていた。しかし、当時の私はそこまで大きく考えていなかった。水道水なんて無限に出るのだから、と。

ある日、母は「水をくむプリンセス」という本を図書館からかりてきてくれた。その本は、ある国の少女が一日に何時間もかけて、川へ水をくみに歩くお話だ。しかし、その川の水はすんだ青色ではなく、茶色い泥水だったという話だった。

このように、水道や井戸がない国では、子どもが毎日水をくみに何時間も歩いているそうだが、しかし、手に入る水は1人5リットル未満の泥水だけ。また、こうした不衛生な水を飲んでいるせいで、毎日八百人以上の子どもたちが命を落としてしまっている。

飲料水だけでなく、トイレも使えない人がいるのだ。世界では、三十四億人が安全なトイレを使えず、4億人が野外排泄している。不衛生な環境は感染症の原因となり、毎日千人以上の子どもがうばわれている。

そのことから、SDGsの目標6で「安全な水とトイレを世界中に」という目標がたてられた。二〇三〇年までに目標を達成できるように、今たくさんの取り組みが世界で行われています。

例えば、病気の感染や悪臭を防ぐ簡易式トイレや空気から飲料水を作る製氷機を作ったり、ぼ金活動をしたり、雪解け水を農業に使ったりと、世界でたくさんの取り組みが行われていた。

この話を聞いたとき、私ははかしくなった。私と同じ年の子が水が飲めないことに苦しんでいる中で、私は飲むことのできる水を無だ使っていた。あのときの水があれば、何人救うことができたのだろうか。

水が飲めることはあたり前じゃない。水は無限にあるわけじゃない。たまたま日本に生まれた私はきれいな水を飲むことができていくけど、もし違う国にうまれていたら、今の生活はなかったかもしれない。幼いころの私のような人がいる限り、水は無だ使いされていく。では、どうすればいいのだろうか。

私は一人一人が節水を行うことが大切だと思います。じゃ口をしめ忘れていないかを確認することはもちろん、使っていないときに水を出しっぱなしにしないこと、水の使う量をできるだけ減らすこと、できる水は再利用すること、「自分はしなくても大丈夫だ」ではなく、1人1人が努力することが大切です。そして、今の地球の状況を知ること。水に苦しんでいる人がいること、水不足がおこりはじめていること、今ある水はけっしてあたり前のものではないこと。知ってから、たくさんの人に伝えること。自分たちができることを一つでも多く実せんすること。

私達の身のまわりにはたくさん水がある。私達もたくさん水に支えられている。しかし、その水はあつてあたり前なのか。もう一度、よく考えてほしい。

水と私たち。つながりがあるからこそ、日々感謝し、大切にすべきだ。